



おたふく

〈東京都〉 東のぶこ 70歳

結婚して5年、3度目の妊娠。

子宮頸管無力症からくる習慣性流産で二度も失敗したので、慎重に暮らした。安定期に入ったころにま

た出血。救急車のサイレンの音が「またダメーまたダメー♪」に聞こえて、歯を食いしばった。「三度目か……」。もうろうとした私の目に、愛らしいおたふく顔の、看護師が映った。

「大丈夫、赤ちゃんの生存、成長が確認できました。赤ちゃんはがんばっていますよ」。出血も止まり、1日数回、本当かなと思いつつ、両膝

上げ体操も素直に続けた。おたふくが目を細め「赤ちゃんもママに会いたいって……」。白い歯がのぞく。希望が生まれた。夫も仕事帰りに、

顔を見せる。「お前は、もう少しで

ママに放り出されるところだったのだよ。断固、食らいついてくれよ」とおなかをさする。出産は祈りだった。

時期を同じくして入院した隣の患者が、声を殺して泣いている。きつと流産か、死産だったのだ、と息を詰めていた。

後でその事情を知った。4人目も女の子なので、ご主人がお見舞いに来ないらしい。

「ご主人さま、お忙しいのよ。ほおら、元気な赤ちゃんよ。ママに似て美人さんだー」とカーテン越しに聞こえる、おたふくの弾むソプラノ。

1970年代は、事前に性別は知らされず、ある意味楽しみだったはずなのに。隣の患者の事情を聞き、

産めるかどうかの不安でいっぱいのは「何とせいたくな……」とつぶやいた。

ある日、おたふくがお隣さんに「娘が4人つてうらやましいわ、『細雪』みたい。年頃になったら、おうちの中は花御殿ね。なかなか利口な方だ。このおたふくになら何でも話せる、頭痛の種も少し遠のいた。

不思議と、かたくななお隣さんも、日々、やわらかい表情になった。

退院の日は、赤ちゃんをいとおしそうに抱くご主人の後ろ姿を追って、満面の笑みで病室を後にしていた。いったい、おたふくは、どんなおまじないをかけたのかしら？

きつと、「お多福マジック」に違いない。